

続・勝負のしどころ

学校長 鈴木 盛 久

昨年4月から、小・中学校において新指導要領が実施された。それともなう学習内容の削減や授業時数の縮減への危惧から、学力低下問題が依然として議論となっている。それを敏感に感じたのか、文部科学省は次期教科書の改訂（小学校においては17年度）にむけて、発展的・補足的な内容をもりこむよう指示している。

ところで、発展といい補充といい、常にそのもとになるのは、学力とは何か、そうして基礎・基本とは何かという問題である。この議論を整理しないままに、対策的で目先だけの学習内容の見直しは、本質を見失う恐れがある。

まず、学力であるが、究極のところ学習の結果、どのような子どもたちを育てたいのかという、めざすべき人間像の設定がまず必要である。そのようないわば学習のめざすべき到達目標の設定ぬきで、学力の中身が従来型であるとか、あるいは新しい学力観に基づく学力であるとか、議論しても何も始まらないのではないか。

その上にたつて、学力の育成のための基礎・基本とは何かを論ずることが大切となる。基礎・基本という言葉も極めて曖昧な使われ方をする場合が多い。時によっては、それらは大きな努力もなしに身に付く低次のものという、いわば軽い見方をされることさえもある。基礎・基本に関して、私は次のように考えている。基本というのは、上に述べた人間像にかかわる部分、いわば学習者の価値観、世界観などの概念形成にかかわる、まさに「根っこ」の部分であり、むしろ「根本」あるいは「本質」といいかえた方が良いものかもしれない。一方、「基礎」とは、この「基本」を学ぶ上での手段となるべき必要条件であり、それは「基本」を学ぶなかで、補強されたり、見直されたりしなくてはならないものであろう。

繰り返しになるが、「基礎・基本」を設定するためには、何のためという「目標」が必要であると思う。各教科、あるいは総合的な学習を通して、たえずめざす人間像を明確にしておきたいものである。その上で、各教科等の学習の特徴をおさえながら、学力の中身の解析と体系化を図ることが必要である。

ふりかえって、教育のめざすべき地平や指導の内容といったことに関しては、国から示されるべきものとして受け身的な構えはなかったであろうか。学習指導要領という縛りはあるにせよ、今や、教師自らの人間観、世界観をもとに、子どもたちと向き合うための基本的な構えを構築し、その具現化に向けて教科内容の検討や教材開発をしていくことが必要であろう。そういう意味で、まさに、勝負のしどころがきたのではないだろうか。

本紀要の研究同人は、日頃からこのような勝負のしどころを意識しつつ、各教科や総合的な学習を通して、子どもたちの自立と育ちを願い、ささやかながら努力を積み重ねているつもりである。皆様のご批正・ご助言を賜るよう心よりお願いする次第である。